

文学作品を授業に活かす ——「英語読解研究演習」試論——

上 岡 克 己

序. 現状と課題

いくつかの社会的要因をうけて、ここ十数年英米文学の研究者が減少を続け、英米文学研究もそれに伴い衰退の一途を辿っている。これは英米文学だけに限らず外国語文学に共通している課題ともいえる。つまり外国語文学専攻の教員、それを支えている共通教育（一般教養教育）の授業が大幅に減少し、かつ共通教育の授業がコミュニケーション中心へと移行した結果、英米文学は大学の共通教育の授業では異端となり、読まれることはほとんどなくなってしまった。

ただここ数年主要な学会において、文学を授業に活かす取り組みが盛んに発信されている。この流れは、渡辺利雄『英語を学ぶ学生と教える教師に——これでいいのか？英語教育と文学研究』（研究社、2001）という刺激的な著書にさかのぼることができよう。その後も「英語教育に文学を！」という特集が『英語教育』（2004年10月増刊号）に掲載され、『英語青年』も「大学の英語教育」という特集（2004年12月号）を組んだ。2007年には東京大学で英語教育のシンポが開催され、報告書として「東京大学の英語教育——改革の道程と今後の展望」が発行されている。

特に『英語教育』に掲載された江利川春雄「英語教科書から消えた文学」は、ショッキングな事実を突きつける。江利川は英語教科書の変遷を概観し、現在の大学における文学の不毛を危惧する。文学教材はなぜ消えたかという項目の中で、産業界が役に立つ英語を進め、脱英米文学へと政策誘導が加速されたこと、「英語が使える日本人を育成せよ」というスローガンとは裏腹に、中学・高校での英語の時間数削減の結果、内容のある英文が読めなくなったことを指摘し、さらにこの現状を打破すべく「教育の目的は人格の完成である。読んで考えさせ、味わい感動させる英語教育がもっと必要なのではないだろうか」（18）と主張する。同じく真野泰が「文学を教材にした授業実践（大学）」（27-29）において、英語教育の主たる目的として「一般的な英語の力の養成」（29）と「言葉に対する感受性の涵養」（29）と主張するのには大賛成である。しかしながら文学至上主義の立場を取るべきでないというのが筆者の意見である。

すなわち、多様な教材（いわゆる英語の四技能）の組み合わせにより、大学生の総合的な英語力の向上が肝要であり、その際にも対象学生の関心事や能力を考慮した教材選

扱が望まれる。いくつかの大学では教員が授業を工夫しながら文学作品を英語の授業に取り入れているようだし、一部の優秀な大学、学部、学科では大学生の専攻如何にかかわらず文学作品の講読は半期程度は取り入れても効果があるだろうが、一律にすべての大学に導入するのは現実的に無理だと思う。すでに平均的な大学生の英語のレベルは相当低下しており、実際のところ現在の大学生レベルで文学作品を授業に活かすのは至難の技と言える。

拙論は大学の英語教育をどうすべきかという高尚な論ではない。各大学の取り組みはそれなりに評価するものの、議論の前提が何かははっきりしない論や、文学の楽しみや教養、人間性の涵養といった他分野の教員にはわかりづらい言葉の羅列はかえって誤解のもととなろう。最大の問題は、文学作品をいかなる大学生に教えるかという基本的な前提が明確に示されていないために、多くの場合わかりづらくなるのである。

例えば大学英語教育学会文学研究会編『「英語教育のための文学」案内事典』（彩流社、2000）は、文学で英語教育の可能性は広がるという前提にたっているが、筆者の期待していた共通教育（一般教養教育）の学生や、文学を専攻しない英米文化コースや英語コミュニケーションコースの学生向きではなく、むしろ従来の英文科学生に読ませたい本である。同じく川口喬一編『文学の文化研究』（研究社、1995）も、文学的色彩の濃い文学理論の解説書であって、高度な内容は研究者向きである。残念ながら今回の授業では高尚な文学・文化理論を教えると言うよりは、英語読解に力点をおき、一般大衆の生きた文化（生活）、基礎的な文化に関する知識を優先した。その点大谷・堀内監修『社会人のための英語百科』（大修館書店、2002）は大変参考になる。

以上見てきたように、英語教育をいかなる視点で捉えるかによって論も随分と幅がある。整理しておかないと、議論がかみ合わなくなる。もう少し原点に戻って考えてみよう。

1. 受講学生によって異なる対応を

自主ゼミや大学院生は別にして、学部学生の英語履修は、大きく二つ——共通教育課程と専門教育課程に分かれる。一般に大学の英語教育とは、この共通教育の英語の授業をさすことが多いが、前述したように今の平均的な大学生の英語力では、一部の大学や英語を専門とする学科を除き、教員が目指す文学作品の講読は無理があるように思われる。この前提に立って、筆者の授業は専門科目ではありながら文学を専攻しない学生を対象とした文学作品の講読の授業実践例である。過去にも筆者の現在の専門である「環境文化論」の授業内容について書いたもの（「『たのしく読めるネイチャーライティング』を楽しく授業する」）（「文学・環境学会ニューズレター」11（2001））、「レイチェル・カーソンを教える——「環境文化論」講義」（「文学・環境学会ニューズレター」26（2009））もあるが、英語読解や異文化、および英語教育に関しての論は今回が初めてのことである。授業名——「アメリカ英語読解研究演習」（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション

ン学科の専門教育科目、英語教職選択科目)

授業の目標——英語によるコミュニケーション能力養成の必要性を否定するものではなく、むしろコミュニケーション力を補うための英語読解力を向上させ、同時に異文化(アメリカの文化)を学ぶ。

授業方法——アメリカ文学の短編を講読する。英語読解力向上のために、辞書を深読みさせる。各種辞典(英英辞典を含む)の活用を促す。

授業内容——アメリカの短編小説を講読する。確かにアメリカ文学にはすぐれた長編小説は多く、筆者も比較的読みやすく、学生の関心も高い *The Great Gatsby*, *A Farewell to Arms*, *The Catcher in the Rye* などを読んできたが、長編小説の講読は15回の授業では学生の方に飽きがきてしまう。その点短編だと3、4回で1編を読みきり、次の作品に移れるので、飽きることはない。もちろん学生の好みも多種多様で、すべての学生を満足させる短編はありえない。アメリカにはすぐれた短編が多いので、短編小説のアンソロジーを選んだ。取り上げたテキストはアメリカのハイスクールで使われている Jack Fields ed. *A Study of the Short Story* (1965) から読みやすいものを選び、注釈をつけたものである。この日本版テキストは、かつての同僚である諸川重剛岡山大学名誉教授と筆者が30年前に注釈をつけた『アメリカ短編小説の読み方 A Study of the Short Story; T. Capote, A. Bierce, C. Aiken』(鶴見書店、1981)であり、本来は当時の一般教育の英語のテキストとして意図したものである。時は移り、今回は専門教育で使用した。履修学生の反応ばかりでなく、筆者自身の30年の歩みを確認しておきたかったからである。

履修者が確定するまでの間、短編小説の醍醐味を味わってもらうために、O. Henry の “After Twenty Years” をコピーして講読することから始める。オ・ヘンリーの他の有名な作 “The Last Leaf” や “The Cop and the Anthem” などを紹介し、短編小説の一つの技法である surprise ending を学ぶ。“After Twenty Years” の詳しい分析は、元田脩一『短編小説の分析と技巧』(開文社、1959)を参照。元田は Edgar Allan Poe の短編小説論をうけて、「プロット構成の正確さ、一語一句の効果の適切さ、とりあつかわれる主題の鮮明さ、全体的統一の厳密さ、ならびに伏線の自然な設置が最も強く要求される……サプライズ・エンディングを持ったプロットの構成こそ、短編小説におけるプロットの構成で最高の技巧を必要とするものである」(18)と解説する。“After Twenty Years” を2回で読み終えた後、いよいよテキストに入り、Truman Capote, “Miriam,” Ambrose Bierce, “Chickamauga,” Conrad Aiken, “Impulse” の順に読み進めた。

履修学生の分布と授業目標

履修者数24名

内訳 4年生8名、3年生14名、2年生1名、研究生1名(時間割上共通教育の必修授業と重なる時間帯なので、基本的には2年生は履修できない)

人間文化学科 2 名、国際社会コミュニケーション学科 21 名、研究生 1 名

この中で英米文学専攻者はいなく、英語（コミュニケーション、第二言語習得論、英米文化史、言語学、実験音声学等）の専攻は 16 名いた。

授業の意図

英語読解の授業なので、第一義にはテキストの精読（vocabulary, idiom の充実）を目指し、あわせて背景となるアメリカの文化的知識を教授した。テキスト精読のために、「辞書・事典」の活用を促し、担当者には約 2 ページの「和訳」と「注釈」を課した。注釈には一部「英英辞典」を使用するようにと指示した。あえて注釈というレポートを課したのは、渡辺が「訓古・注釈の伝統」の中で「今こそ訓古・注釈の伝統を」（『英語を学ぶ』77）と強調しているように、筆者自身もそのような授業を受けてきた世代で、正確な読みの重要性を身にしみて感じているからに他ならない。したがって学生たちにも「辞書の深読み」を強く促した。各種の辞書・事典類にあたることで正確な知識ばかりか、微妙な英語のニュアンスに接することができる。例えば、学生の盲点となっている類義語、look at, see, watch や、speak, talk, tell, say、さらに night と evening の相違、また go と come の語法についてもテキストに登場するたびに指摘した。現在の英和辞典は類義語の説明が大変詳しくなっており、教える側にとっても参考になるところが大であった。

なお文学作品の分析に関しては、授業科目との整合性や時間的制約もあり、最小限に留めた。著者や参考文献（日本人研究者による研究書）に言及したが、英文の批評論文を読む余裕はなかった。

文学作品を活用しながらも、英語読解力向上と異文化理解が最優先課題だったので、いわゆる文学批評なるものは深く追究しなかった。ただどの短編も履修学生には強烈な印象と深い感銘・余韻を与えたのは間違いのないところで、渡辺がハロルド・ブルームを引用して語る「文学は社会改革の手段としてあるのでも、個人の人格形成に役立つ教科書として利用するためにあるのでもなく……文学体験というのは、その自律的作者とこれまた、自律的な読者が運命的な出会いをし、対話をかわす場、……人間に対する深い真の理解が可能となる。……ほかでは見出すことのできない「喜び」と「楽しみ」ともなう人間の知的な営み」（8）につながってほしいと望むのみである。なお本演習は「翻訳」を目指したものではないが、さらにこなれた訳を目指す者には、『新編英和翻訳表現辞典』（研究社、2002）があることを示した。

2. 授業実践例

——Truman Capote (1924–84) の短編 “Miriam” (1945) を読む

テキストには簡単な著者紹介があるが、著者、著書を調べるためには文学辞典を引かなくてはならない。比較的簡単に入手できるものとして、上田・渡辺・海老根編『20世紀英語文学辞典』（研究社、2005）、木下他編『英語文学辞典』（ミネルヴァ書房、2007）があり、やや古いものには齋藤勇監修『英米文学辞典』（研究社、1985）がある。アメリカでは James D. Hart, *The Oxford Companion to American Literature* 6th ed. (Oxford UP, 1995) が最もポピュラーな文学辞典である。なお文学辞典よりさらに詳しいカポーティの記述が、渡辺利雄『講義アメリカ文学史 [全3巻]』（研究社、2007）第67章にある。本演習もこの章を参考にして進められた。研究書としては国内では、稲澤秀夫『トルーマン・カポーティ研究』（南雲堂、1985）が代表的なもので、その他内田豊『トルーマン・カポーティの作品論集—「グロテスクなもの」との出遭い—』（開拓社、2006）がある。海外の研究書は省略した。

著者や時代背景を全く考慮せず、作品自体を独立した存在として読むニュークリティシズムの批評理論もあるが、本演習ではともかくも学生に文学のわかりやすさをモットーにしているので、文学理論は避け、学生の関心の方を重視した。カポーティへの関心を誘うために、彼の代表作の一つ、*Breakfast at Tiffany's* (1958) を取り上げ、時間に余裕があればこの映画を見せるのもよいだろう。オードリ・ヘプバーン主演のこの映画、最後に流れる「ムーン・リバー」の音楽はこの作品を一層感動的なものにしている。とはいえ、ラブロマンスの映画と、自由な女性を描く原作では結末のシーンは大違いで、この点注意しなければならない。しかしながら時代背景（第二次大戦中）やニューヨークの風景（舞台）が“Miriam”と重なっているので、映像という視覚に訴えるのもよいだろう。英文解釈だけの90分の授業は今の学生には負担のようで、映像や音楽を適宜効果的に活用するのも悪くはないと思う。

辞書の話

英語読解の授業では辞書を引くことが最低条件である。特に文学作品の講読の場合、中辞典レベルでは心もとなく、英和大辞典を必須とした。ここでいう英和大辞典とは、『ジーニアス英和大辞典』（大修館、2001、以下ジーニアスと略する）、『ランダムハウス英語大辞典』（小学館、1994、以下ランダムハウスと略する）、『新英和大辞典』（研究社、2002、以下新英和と略する）で、かつて岩波書店から『岩波英和大辞典』（岩波書店、1970）が発行されていたが、今は絶版となっている。実はこの岩波英和大辞典に関わった忍足欣四郎には『英和辞典うらおもて』（岩波新書、1982）という辞書編集の苦労話がかっており、学生には是非読ませたい本の一つである。コンピューター化された現在

の辞書編集とは異なるであろうが、言葉そのものへの興味は尽きることはない。

英英辞典としては、*The Oxford English Dictionary* (以下 OED と略する)、*Webster's Third New International Dictionary of the English Language* (以下 W3 と略する)、*Random House Dictionary of the English Language* (以下 RHD と略する) と、*Dictionary of American Slang* (以下 DAS と略する) を紹介したが、今の学生は全員が電子辞書を携帯し、そこにはここで紹介した辞書ではなく『ロングマン英英辞典』が入っていた。辞書は新しければ新しいほどよいというわけではない (*Webster's Second* の例外がある) し、大辞典にいたっては高額なものも多いので、図書館参考室での調べを要求したが、その期待ははずれ、皆電子辞書で済ませていたのは残念であった。Chaucer や Shakespeare を学ぶことがなくなった学生に、OED を毎回引かせることはもはや高嶺の花なのだろうか。ともかく不明な箇所は辞書にあたることが英語読解の第一歩であることを機会あるたびに説明した。図書館が公共の知の宝庫なら、辞書は個人の知の宝庫なのである。

辞書の一冊を一通りした後で、授業はいよいよテキスト講読に移る。まずは“Miriam”の冒頭の一節を見てみよう。(引用は前述した鶴見書店の版による)

MIRIAM

Truman Capote

FOR several years, Mrs. H. T. Miller had lived alone in a pleasant apartment (two rooms with kitchenette) in a remodeled brownstone near the East River. She was a widow: Mr. H. T. Miller had left a reasonable amount of insurance. Her interests were narrow, she had no friends to speak of, and she rarely journeyed farther than the corner grocery. The other people in the house never seemed to notice her: her clothes were matter-of-fact, her hair iron-gray, clipped and casually waved; she did not use cosmetics, her features were plain and inconspicuous, and on her last birthday she was sixty-one. Her activities were seldom spontaneous: she kept the two rooms immaculate, smoked an occasional cigarette, prepared her own meals and tended a canary.

タイトルの持つ意味

精読の最初はタイトルの Miriam の意味を考えることである。女性の名前、Mary の別称であることは自明として、その他に意味がないかを調べることをしなければならない。というのも作者はしばしばタイトルに重要な意味を持たせているからである。前述した *The Great Gatsby*, *A Farewell to Arms*, *The Catcher in the Rye* 然りである。ランドムハウスによれば、女性名の前に最初の意味として、「Moses と Aaron の姉、女預言者、聖書 Num 26:59」とある。Num は Numbers の略で、旧約聖書の「民数記」（旧約聖書第4巻；エジプト脱出後のイスラエル人の人員調査を内容の一部としている）のことである。一般的に英語は西欧キリスト教文化圏で誕生した言語で、英語を学ぶためにはキリスト教の思想、特に聖書の知識が不可欠となる。例えば『聖書でわかる英語表現』（岩波新書、2004）などを参照すれば、数多くの聖書の引用が見られる。なお聖書に次ぐ引用の多さはシェイクスピアであることにも言及する。今の学生は英語を勉強しても、シェイクスピアを知らないまま卒業することが多い。さて本題に戻ると、このミリアムという女性名には「女預言者」という意味もこめられているのではないかと、学生たちにこの短編のテーマの一部を示唆する。

登場人物の性格描写

最初に大都会ニューヨークの片隅にある簡素なアパートで、ひっそりと暮らす未亡人 Mrs. Miller が紹介される。夫が残してくれた生命保険で生活には困っていないが、親しい友人もなく、めったに外出することもない。服装にも無関心で、化粧もしない。年齢が61歳であると明確に書かれている。当時（後に時代は第二次大戦中であることがわかる）としては高齢者に属することが想像される。最後の方で、葉巻を吸っていること、カナリアを飼っている事実が何気なく語られているが、後にストーリーの展開上微妙な伏線になっていることがわかる。

和訳と語句の説明——訓古の学＝注釈は時代遅れか？

apartment 「アパート」 周知の単語だが確認する。「共同住宅の中の、家族が住む住居のこと」、建物自体は8行目に登場する“house”、an apartment building (house) という。mansion は通常「大邸宅」の意味なので学生が住む「マンション」は英語では apartment になる。なお家族が住むマンションは、《米》condominium 《英》flat と呼ばれている。

kitchenette 「簡易台所」 kitchen+ette、-ette には ①小さいものの意を表す名詞を作る、cigarette ②女性名詞を作る、usherette ③代用品の意を表す名詞を作る、leatherette 「レザーレット (革のように見せかけた紙または布)」

remodeled 「改造した」 発音注意 model [mádl|módl] モデルでは通じない。日本語の「リフォーム」に相当する。なお英語の reform は「改革する」で、家のリフォームには使用できない。このように日本語には本来の意味とは異なる使い方をしている外来語が多いので、注意を促す。例として、naive は「繊細な」ではなく、「無知の、無邪気な」、trump は「トランプ」ではなく「切り札」、トランプは英語では card となる。

brownstone 「褐色砂岩」 翻訳 (川本三郎訳『夜の樹』、村上春樹訳『ティファニーで朝食を』) では共に「ブラウNSTOON」だが、おそらく読者にはわかりづらい訳だろう。『広辞苑』にも収録されていない。「褐色砂岩で造られたアパート」のことで、図解辞典 (後述する) の一つ『アイ・シー・オール』には写真が掲載され、「建築材料として赤褐色の砂岩、それを正面に用いた家、20世紀初めには富裕層が住む」の説明があるので、おおよその検討はつく。さらに『ニューヨーク情報辞典』にはこの砂岩がコネチカット、ニュージャージー両州で採れたことがわかる。

the East River 「Long Island Sound と Upper New York Bay を結ぶ海峡」 sound 「海峡」 → 「ニューヨークの文化と文学」、復習として river, stream, brook の相違を教える。

widow 「未亡人」 男性形は widower

left 「残した」 leave には様々な意味があることを再確認する。leave, leave for, leave behind, leave ~ to, leave の名詞の意味「休暇」

reasonable 「穏当な、適当な、まあまあの」がよく使われる。a reasonable price 「手ごろな値段」、しかし限定的な意味で「量(数が)かなりの」もあり、例として a reasonable number of students 「かなりの数の学生」とある。本文では a reasonable amount of insurance で「困らない程度の保険金額」か「相当な保険金額」かどちらともとれるが、文脈から前者をとる。

insurance 「保険金」 insurance company 「保険会社」、なお insure 「保険をかける」と同音の ensure は「保証する、確実にする」

to speak of 「とりたてて言うほどの」、ジーニアスによれば、否定文の前の(代)名詞を修飾する。例として Our country has no natural resources to speak of. 「我が国にはこれといった天然資源がない」、なお「話し相手がいない」なら no friends to talk to (with) となる。ここでは友達がいることはいるが、親しい友人はいないと言っているのである。speak, talk, say, tell の相違を確認する。いくつかの辞典に詳しい説明がある。大津幸一『英語の疑問=こう考えてみよう』(岩波ジュニア新書、2004)にもわかりやすい説明がある。この本には他に big と large、look, see, watch、tall, high、arrive at, arrive in、night, evening などの説明もあるので、教員志望の学生には必携である。また里中哲彦『英語の質問箱——そこが知りたい100の Q&A』(中公新書、2010)も参照するといいたいだろう。

journeyed 「出かけた」、to go on a journey, travel: go from home to a distant place (W3) 多くの学生にとって journey, travel=「旅」の意味しか知らない。本文で「旅した」と訳せば完全な誤訳である。journey にも travel にも「出かける」という意味もあり注意したい。なおジーニアスには trip, travel, journey, voyage, excursion, flight の区別が紹介されている。trip は《米》では長・短いずれの旅にも用いるが、《英》では短い旅行、travel は通例周遊（観光）旅行、《英》では長距離（外国）旅行、tour 組織化された計画的な視察（観光）旅行、journey 通例陸路の長い旅行に用い、より形式ばったロマンティック（文学的）な色合いをもつ、voyage 船（飛行機、宇宙船）による長い旅行、excursion 通例団体での小旅行、遠足、flight 飛行機による旅行。

clothes 「衣服」 発音は [klóuz, klóuðz]、その他注意すべきものとして mouths [máuðz, máuθs] months [mánθs, mánts] paths [péðz, pðz, péθs]

grocery 「食料雑貨店」 grocery=grocery store で、P.13では grocer's となっている。

matter-of-fact 「地味な」「現実に即した、実務的な、割り切った、ドライな、感情をださない」とあるが、ここでは衣服の話なので「地味な」がよいだろう。なお OED によれば、Usually written with hyphens とあり、初例が1712年と古くからある言葉であることがわかる。

iron-gray 「白髪が混じった」 ジーニアスには「鉄灰色の」とあるが、『広辞苑』（第六版）にはそのような語は収録されていない。OED によれば、*adj.*: Of the grey colour of freshly broken iron, or of dark hair when 'turning grey'. とある。本文ではミラー夫人の髪の毛の話であるから、後半の意味に解釈する。なお OED の説明にある dark は髪の毛が黒いということ。また OED の説明では grey, colour とイギリス英語の綴りが使用されている点にも注意。（→「アメリカ英語とイギリス英語の相違」）なお iron 発音注意 [áiərn] 日本語では「アイロン」の意味が普通であるが、最近ではゴルフ用語としての「アイアン」が普及してきた。

cosmetics 「化粧品」通例複数形、発音注意 [kazmétique|kɔz-]

features 「容貌」 通例複数形で「顔つき、容貌、目鼻だち」（ランダムハウス）

plain 「容貌が人並みの」、主に女性の顔が美しくない、器量が並みの意味で使われる。《米》では ugly, homely, plain の順に婉曲的になる（ジーニアス）

inconspicuous 「目立たない」conspicuous の反対語

on her last birthday 「この前の誕生日に」 曜日、日付の前では on を使用。ただしクリスマスには注意。on Christmas「クリスマス当日」、at Christmas「クリスマス季節」、over Christmas「クリスマス休暇中に」、on Christmas eve「クリスマスの晩」

activities 「行動」（ある目的のために反復される一定の）活動。act は行為の結果に重点を置く語で、瞬間的になされる個々の完結した行為、action は行為の過程に重点を置く語で、一定期間継続したりまたは繰り返し行われる行動（『現代英語語法辞典』）。最所フミは『英語と日本語——発想と表現の比較』の中で、次のような例を挙げている。
an act of God「神のしわざ」 the action of a drug「薬の作用」（194-95）。

canary 「カナリア」[kənɛəri]、発音注意 career, Korea, canal も発音に注意したい。

冒頭の一節の試訳を以下にあげておく。

数年間H・T・ミラー夫人は、イースト・リバー近くにあるリフォームされた褐色砂岩造りの快適なアパート（簡易台所付きの二部屋）で暮っていた。彼女は未亡人で、夫は不自由しないほどの保険金を残してくれていた。彼女の関心事は狭く、特に親しい友人もいなく、せいぜい角の食料雑貨店に出かける程度だった。アパートの住民は彼女に気をとめることもないようである。服は地味で、髪は白髪が混じり、短く切って軽くウェーブをしていた。化粧品は使用せず、容貌と言えば人並みで、目立つことはない。この前の誕生日に61歳を迎えた。自ら積極的に行動することはず、二部屋を清潔に保ち、時折葉巻を吸い、食事の準備をしたり、カナリアの世話をしていた。

アメリカ英語・イギリス英語の違い

先ほど OED の iron-gray の説明にもあったように、アメリカ英語とイギリス英語では若干の相違がある。『現代英語語法辞典』（三省堂、2011）には詳しい解説が載っている。授業ではごく簡単に紹介するにとどめる。綴りの違いは先ほどの例がふさわしい。その他あげればきりがなが、specter (spectre), center (centre), theater (theatre) encyclopedia (encyclopaedia), neighborhood (neighbourhood), harbor (harbour), organize (organise)。なおランダムハウス社発行の原書では theatre という英国式の綴りになっている。テキスト P. 2 には pavement がでてくる。《米》では車道、《英》では歩道を指す。なおアメリカでは歩道は sidewalk を使う。このように意味の違いは誤解を招くので注意を要する。笑い話ではないが「英米人が the first floor で待ち合わせをする場合、イギリス人は2階で、アメリカ人は1階で待つことになる」、イギリス英語では1階は ground floor となる。地上階では米英の数え方が1階ずつずれる。その他有名なものとして、地下鉄は《米》subway、《英》underground (tube)、subway は《英》では「地下道」を意味し、そのアメリカ英語は underpass である。《米》elevator 《英》lift、遠視は《米》farsighted、《英》long-sighted、近視《米》nearsighted、《英》short-sighted。『英米事情ハンドブック』（英潮社、1993）は発音・綴り・語彙・文法の相違について簡潔にまとめているので初心者には参考になる。

ニューヨークの文化と文学

冒頭のわずか1ページの語句だけを取り上げても、教えるべき英語情報量は多岐にわたる。読解と同程度重視したのが、異文化（ここではアメリカ文化）の知識である。幅広い文化に対する教養があってこそ言語は真に理解されるというのが筆者の立場である。冒頭4行目に the East River が現れるので、作品の舞台がニューヨークであることがわかる。固有名詞は辞典に出ていないのも数多くあるが、East River や Hudson River がニューヨークのマンハッタン島の東西を流れる川(海峡)であることは常識として知っておきたい。ニューヨークに関しては、多くの文献があり、一言で定義するのは難しいが、多民族・多文化が激しく交じり合うエネルギッシュな大都市であるとしておこう。映像もたくさんあり、ビデオやDVDで見るのもいいだろう。手ごろな文献としては賀川・桑子『図説ニューヨークの都市物語』（河出書房新社、2000）、亀井俊介『ニューヨーク』（岩波新書、2002）、上岡伸雄『ニューヨークを読む——作家たちと歩く歴史と文化』（中公新書、2004）がある。授業では『ニューヨークを読む——作家たちと歩く歴史と文化』のニューヨークの地図を参照しながら、ニューヨークの歴史と文化、特にニューヨークを舞台とする名作（19世紀のホイットマンから現代のドン・デリオ）を紹介し、単なるニューヨーク観光に終わらないように留意した。また現在の筆者の関心事のひとつである環境文化との関連で話した。というのもニューヨークを代表するセントラルパークは、後の国立公園設立に大きな影響を与えているからである。さらに自由の女神（The Statue of Liberty）が National Monument としてアメリカの国立公園システムの一つになっていることを教える。

ニューヨークを舞台とした作品といえば、サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を思い出す。サリンジャーの生涯を語るのも面白い。なぜ彼が執筆を中断したのか考えるのも楽しい。学生にも人気のある村上春樹の翻訳を引用してニューヨークの雰囲気伝える。いや主人公ホールデンの無垢な生き方が現在の学生にどのような反応を与えるかを見たかった。

僕のうちはニューヨークにあるんだけど、セントラルパークの池のことを考えていたんだ。セントラルパーク・サウス通りのそばにあるやつのことだよ。僕はこんなことを思った。僕がうちに帰るときにはあの池はもう凍りついてしまっているだろうか？ もしそうだとしたら、あそこにいるアヒルたちはみなどこに行くのだろう。池全体ががちがちに氷結したとき、アヒルたちはいったいどこに行くんだろう。(25)

で、僕がそこで「ただっぴろいライ麦畑を指す」何をするかっていうとき、誰かその崖から落ちそうになる子どもがいて、かたっぱしからつかまえるんだよ。つまりさ、よく前を見ないで崖の方に走っていく子どもなんかがいたら、どっからと

もなく現れて、その子をさっとキャッチするんだ。そういうのを朝から晩までずっとやっている。ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいんだ。たしかにかなりへんてこだとは思うけど、僕が心からなりたいたいと思うのはそれくらいだよ。(293)

このようなサリンジャーへの言及は決して授業の脱線とは思わない。むしろ自分自身の経験から、昔教授からうけたテキストの中身より教授の何気なく語った辞書や他の作家への言及がいつまでも頭の中に残っているものである。さて本来の「アメリカ英語読解研究演習」に戻るとしよう。冒頭の一節に随分時間を費やしたので、2ページ以降は重要な語句にのみ焦点をあてながら進めることになる。

P. 2 **fine** 「細かな」 **fine snow** 「粉雪」 **fine rain** 「こぬか雨」

pavement → 「アメリカ英語とイギリス英語の相違」

drugstore 「ドラグストア」、いまではだれでも知っている単語だが、当時（第二次大戦以前）の日本人には珍しかったのであろう。中内正利『アメリカの風物』（研究社、1953）は驚きをもって記している（25-31）。日本のドラグストアと違い、軽食や飲み物を取ることができるのが特徴である。実際のところ、テキストの最後にある“**Impulse**”にはドラグストアが舞台の一つである。今から60年も前に出版されたこの著書はもうすでに役割を終えたと思って、処分しようかと思いつつ持っていたが、今回の授業では思いもがけず役立った。すなわち「**ミリアム**」の時代背景と中内の記述が重なるのである。戦前のニューヨークを知る上で格好の本となった。（→ P. 13 EI）同様に現在では絶版となってしまった『英米風物資料辞典』には写真が挿入され理解に役立つ。やはりいかなる本も時代を超えて大切に受け継いでいかななくてはならないとつくづく思った次第である。

box office 「（劇場・音楽会などの）切符売り場」、鉄道の駅の切符売り場は **ticket office** といい、空港などは **ticket counter** という。

took her place 「位置についた」 **take place** と誤解しないように。

change 「小銭」、その他「乗り換え」、「つり銭」、「気分転換」、「着替え」の意味もある。例、**Keep the change.**

taking its own time **take one's time** 「ゆっくり、必要以上の時間をかけてやる」

in the way she stood 「彼女の立っている様子」**in the way** の後に **in which** または **that** の省略、例、**I don't like the way she smiles.**

P. 3 **Would you care to do me a favor?** 「お願いをしてもいいですか?」**care to** と **do one a favor** はともに慣用句。

let の用法、「～させる」という **let, make, have, get** の区別はなかなかむずかしいものである。一般的に **make** は、人が主語の場合には強制的、物事が主語の場合には非強制的。**have** は **make** と **let** の中間で、主に目上の者が目下の者に～させる（してもらう）、しかるべき職業の人にその職務として～させる、してもらう。次のような例が参考になる。**He made me go.** 「私を強制的に行かせた」

He let me go. 「彼は（私が行きたがっていたので）行かせた」

He had her go. 「彼は彼女に頼んで行ってもらった」

get の語法は、SVO doing と SVO+to do があり、後者の場合、人が説得などして人に～させる、してもらう。

two dimes and a nickel 「10セント硬貨2枚と5セント硬貨1枚」、アメリカの通貨について学ぶ。貨幣は1セント（通称 penny）、5セント（通称 nickel）、10セント（通称 dime）、25セント（通称 quarter）、50セント（通称 half dollar）、1ドル（通称 silver dollar）、があり、紙幣は裏側が緑色なので greenback という俗称をもち、1ドルから2, 5, 10, 20, 50, 100, 500, 1000, 5000, 10000ドルまでであるようだ。実際には2ドル紙幣や1000ドル以上の紙幣は一般には流通していない（『英米事情ハンドブック』72）。貨幣について、亀井俊介「コインに見るアメリカの文化」（『わがアメリカ文化誌』128-33）によれば、コインには国民への教訓ないし激励の思いをこめて南北戦争中の1864年 “In God We Trust” が刻まれ、後に紙幣にも使用されるに至った。さらに “E Pluribus Unum” 「多数より成る」というラテン語も刻まれ、アメリカのモットーとなっている。まさにアメリカが多民族国家であることの証明である。

P. 4 **consume** 語彙力向上のために、名詞、形容詞、その他関連語句もあわせて教える。consumption, consumption tax 「消費税」, consumer, green consumer 「環境に優しい消費者」, consumptive, consumerism 「消費者保護活動」

Why 「まあ」 why は間投詞であって、疑問副詞ではない。

purse 「ハンドバッグ」 この単語もよく誤訳されるが、女性のハンドバッグのこと。purse = 「財布」ではない。なお purse は「がまぐち」、wallet は「札入れ」

It was nice to have met you. 「お会いできて良かったです」 Nice to meet you. という初対面の挨拶はだれでも知っているが、別れの表現を知らない学生が多い。Nice meeting you. とも言う。なお初対面でない場合、Nice to see you. Nice seeing you. となる。

P. 5 **scrambled eggs** 「いり卵」、昔ボストンかシカゴのYMCAに泊まった時、朝食がついていた。朝1階の軽食カウンターで朝食を頼むと、「卵はどうされますか」 How would you like your eggs? と尋ねられ、一瞬躊躇した。日本なら卵料理といえば、卵焼き (Japanese omelet) に決まっている。しかしここはアメリカ、卵料理の種類を尋ねられたのだ。とっさに卵料理の英語が浮かばず、隣の客が食べていた卵料理を注文した。それが scrambled egg と呼ばれるものであった。卵を牛乳やバターとともにかき混ぜるもので、誰でも作れる料理である。卵料理にはその他、目玉焼き (fried egg、片面焼き sunny-side up、両面焼き egg over) があり、ゆで卵 (boiled egg、かたゆで卵 hard-boiled、半熟卵 soft-boiled という。けっして half-boiled とは言わない) 以前 poached egg という表現を見たことがあり、ジーニアスによれば、「落とし卵」という訳になっている。この意味がよくわからず、広辞苑で確認したところ「落とし卵」とは「吸い物の汁の中へ生卵を割って落とし料理」とあった。日本人ならその生卵をかき混ぜて食

べると思うが、poach とは「割った卵を熱湯に落しゆでる」(新英和)とあるので、半熟の卵のようにして食べるのであろうか。日本語と英語の微妙なずれがあることを知った。なお卵以外にもドレッシングはどうするのか、肉の焼き具合はどうするのかも聞かれる。それぞれ How would you like your dressing? How would you like your steak? ドレッシングも一つぐらい知っておかないと困る。後者は日本でも焼肉店が増えたので、rare, medium-rare, medium, well-done はもうおなじみであろう。

I'm coming. 「今行きます」、なぜ come が「行く」になるのか、初心者にはなかなかわかりづらいところである。ジーニアスには「話しての方へやって来る、聞き手の方へ行く」とある。例文が参考になる。“Come downstairs. Dinner's ready.” “I'm coming.” 聞き手の方へ行くから come が使われている。では Come to my office. と Go to my office. ではどうだろうか。前者は「私のオフィスに来なさい(そこで待っていますから)」と言っているのであり、後者は「話して手がオフィス以外の地から聞き手に指令」している状況である。come と go と同じく間違いやすい単語に bring と take がある。どちらも「持って行く、人を連れて行く」の意味だが、bring が「聞き手の方に持って行く、連れて行く」のに対し、take は「聞き手のいる場所以外へ持って行く、連れて行く」の意(大津64)。次のような例が参考になろう。

I'll bring the letter to you. Father took Tommy to the zoo.

What in heaven's name? 「一体どうしたの」、heaven = 「天国」の意味しか知らないようでは困る。しばしば強調で使用される。

gave away 「はずれた」 give away 「退く」、「譲歩する」

P. 6 **hall** 「玄関」、hall は「玄関」と「廊下」の両方の意味がある。注釈「廊下」は間違い。

a beret to match 「似合うベレー帽」 beret 発音注意 [bə'rei, bérei|bérei, béri]

P. 11には bouquet [bukéi, bu:-|bukéi] がある。フランス語から英語になったもの。ちなみにアンケートという日本語はフランス語に由来し、英語では questionnaire というので注意する。fill out a questionnaire 「アンケートに記入する」

have on 「着ている」 着る動作は put on を用いる。例、put on a new coat, put a new coat on

place 「場所」というよりより具体的な「住居、家」、a residence, dwelling, or house (RHD)

P.7 **seated herself** 「座った」 自動詞、他動詞の区別を教える。seat は他動詞で「座らせる」、例、Please be seated. 「(法廷などで)お座りください」、日常生活では Sit down, please. sit は「座る、座らせる」

for a second time 「もう一度」、序数の前に使われる a は another の意味を持つ。このことを知らない学生が結構多い。(→資料「アンケート」)「再び」と訳しても誤訳ではないが、次のような例が参考となろう。He tried to jump up a third time. 「彼はさらにもう一度飛び上がろうとした」(三度目ということよりも、一度、また一度、さらにもう一度という含み)(ランダムハウス)

phone book 「電話帳」 phone directory とも言う。参考 Yellow Pages 「職業別電話帳」
P. 8 **I'm starving.** 「おなかぺこぺこなの」 hungry よりも感情があらわになっている
る = I'm starved.

I can't help the weather. 「お天気のことはどうしようもありません」 help は can,
can't とともに用いて「避ける、防ぐ、こらえる」

weighing weigh「重さを量る、よく考える」、P. 9 **weight**「重くする、重みをかける」
Very well 「承知しました」(不本意な承諾を示す)

burn 「焼く」 英語には「焼く」という単語がたくさんある。burn は「物を焼く」意味で広く使えるが、その物を破壊してしまうので、料理には使えない。料理に使うと「焦がす」ことになる。日焼けの意味にも使う。sunburn。cook「食物を火・熱で料理する、焼く」、roast 「肉などをオープンまたは直火であぶる、焼く」、broil 「肉・魚などを焼き網・グリルを使って直火で焼く」(主に《英》grill)、toast 「パン・ベーコンなどをこんがり焼く、トーストにする」、bake 「パン・魚などをオープン・熱灰などで焼く」(ジーニアス和英辞典)

P. 9 **alcove** 「アルコーブ」、実はこの単語が30年前注釈をつける上で一番の難問であった。というのも英英辞典を引いてもどのようなものか形が想像できなかったのである。通常なら図解辞典、当時なら『アイ・シー・オール』にでていても不思議ではないが、なかった。(ちなみに現在の図解辞典『図解英和大辞典』、『ビジュアルディクショナリー』にも掲載されていない) 現在の英和辞典では『ジーニアス』1. 部屋の壁の一部を引っ込ませて作った小空間 (niche) (ベッド、書棚、いす、飾り物などを置く)、引っ込み (recess)、床の間、アルコーブ

『ランダムハウス』 1. アルコーブ：凹室：部屋に付随、または部屋の一部分がくぼんだ小室、2. アルコーブ：凹所：ベッド、本棚などをしつらえるため壁の一部を引っ込ませたところ、日本建築の床の間 (niche)

『新英和』 (室内) の入込み、アルコーブ (nook)、(寝室、食堂などに使う小部屋)

結局文字だけでは理解できなかったが、最近の辞書の優秀さは、なんと図解辞典にはなかったが、ジーニアスと新英和にはアルコーブの挿絵が掲載されているのである。これにはさすがに驚いたが、両方の挿絵とも小さな応接室を思わせるものである。これが「ミリアム」に登場するアルコーブ(居間から寝室に通じる小部屋)かもしれない。

bureau [bjúərou] 「鏡つきの寝室用タンス」 a low chest of drawers with a mirror for use in a bedroom (W3)

Suppose—perhaps you'd better put it back suppose はより控えめな表現、perhaps は丁寧な依頼・提案「できましたら」、had better は目下の人には「～しなさい」という強い表現となる。目上の人には I think, Maybe, Perhaps を用いる。

P. 10 **trick reflection** 「生き写し」 trick は「巧妙に作られた」(W3)、reflection 「よく似たもの(人)」

P. 11 **tap** 「落とす」 新英和に tap the ashes from the cigar 「葉巻の灰をぽんと落とす」

す」という例文がある。

Miriam lifted a shoulder, arched an eyebrow 「ミリアムは肩をすくめ、まゆをしかめた」、あらゆる言語にはその言語に特徴的な「しぐさ」がある。英語にも膨大なしぐさに関する表現があり、ネイティヴでないと完全には理解できない。その隙間を埋める最高の辞典『しぐさの英語表現辞典』が刊行されて、しぐさに関する英語が理解できるようになった。arch an eyebrow は「抵抗するようにまゆをひそめる」とある。しかしこの大辞典でさえ lift a shoulder は載っていない。おそらくは不快感を表すために肩を上げるしぐさ、つまり shrug 「肩をすくめる」のことだろう。筆者がしぐさの英語表現で最も印象に残っているのは、keep (have) one's fingers crossed 「(人差し指の上に中指を重ねて) 幸運を祈る」で、まるで囲碁で石を置く動作と同じである。今ではたいていの辞書に挿絵入りで紹介されている。

a cup of tea だれでも知っている表現だが、外山滋比古は『英語の発想・日本語の発想』の中で、「もののかぞえ方」について触れている。要約すると、日本語のもののかぞえ方は、洋服なら1着、2着、着物なら1枚、2枚、靴は1足、家は1軒、自動車は1台、木は1本、机、椅子は1脚など。これらの表現は外国人を悩ませる。ただ英語にも a cup of coffee, a sheet of paper, a piece of chalk, a cake of soap, a loaf of bread などがある。英語ではかざられた助数詞 (numeral) しかないが、日本語ではこれがたくさんある (66-67)。

P. 12 **unbalanced** 「取り乱した」、日本語はアンバランスを使用するが、imbalance の方が一般的。

P. 13 **cash a check** 「小切手を現金化する」、一般の日本人が小切手を利用するのは海外旅行に出かけるときに traveler's check を購入するくらいであろう。アメリカでもクレジットカードの普及や現金振込みなどで小切手の使用は減少している。

Avenue と Street New York では Avenue は「南北の通り」、Street は「東西の通り」をいう。

at the corner on the corner, in the corner との比較は、『現代英語語法辞典』によれば、どれも可能だが、ニュアンスの違いがある。場所の限定が強く感じられるのは at, in である。in はさらに「あるものの中に」という原義をもつので、in the corner は周囲が囲まれた場所の内側の隅を意味する。at は囲まれているという概念はない。on は漠然と表面の接触を表すので、at の場合ほど場所の規定を強く感じさせない。『日本人の英語』『続日本人の英語』(英語の感覚を磨くためには学生にとって必携の書)の著者として有名なマーク・ピーターセンは、『日本人が誤解する英語』の中で、「in は、ある空間の中を表す、on は、ある表面を表す、at は、ある1点を表す」(32)として、次のような面白い例を紹介している。I arranged to meet her in the Budokan. 「武道館の中で」、I arranged to meet her on the Budokan. 「武道館の屋根の上で」、I arranged to meet her at the Budokan. 「武道館で」

from the corner of the eye 「片目で」この表現にも30年前は苦労した。今ではジーニアスに例文が載っている。

EI 「高架鉄道」、これも『アメリカの風物』(120-35)に写真入りで説明がある。現在では取り壊されて存在しないので、貴重な写真と言える。中内によれば、騒音や市街の風致を害する点もあり、1938年ごろから取り壊しが始められ、今では多分 Third Ave. EI を残すのみとなっているはずである(126)。この記述どおり、本文では Third Avenue が登場し、ミラー夫人はある老人と出会うことになる。すでに過去のものと思われたこの本が、写真入りで読めるとは思わず微笑みたくなる。

P. 14 telling 「意味ありげな」、名詞の「話」ではなく、形容詞「有効な、骨の折れる、大そう手がかりになる」例として、a telling look 「意味ありげな目つき」、あわせて teller も教える。「話し手」という意味と「銀行の金銭出納係」の意味がある。皆さんが毎日お世話になっている ATM は automatic (automated) teller machine の acronym (頭字法)であることを教える。

tipped his cap 「(挨拶のために) 帽子にちょっとさわった」

dusted with sugar 「砂糖をまぶした」、dust は「埃」ではない。

P. 15 awaited the hand 「食べてくれる人を待っていた」await は wait より堅い語。

P. 16 sliver 「少し」、silver と間違えないこと。

atop 「～の上に」、この a- は「《文・古》～の方へ、～の中に、～の上に」

cardboard box 「段ボール箱」、ボールは「ボール紙」のことで、board が転じた(言葉の音が別の音にかわること)もの(『辞林 2 1』)

disinterestedly 「無関心に」、通常「私心のない、欲得なしの」で使われるが、「無関心な」意味に取られるおそれがあるので、impartial, unbiased を用いる人が多い。

remainder 「残り」、reminder 「思い出させるもの」と混同しないようにさせる。

P. 17 It's all clothes. it は集合名詞に照応。衣服 1 枚を意識する時には they になるところ。ちなみに「ベビーウェア」は和製英語で、baby clothes が正しい。

Wasn't it nice of you to ~ 「～してくれてなんとご親切なんでしょう」、有名な構文、It is + 形容詞 + of + (代) 名詞 + to do、ただし形容詞の brave, cowardly, foolish, kind, rash, smart, silly, stupid, wise などには for も可能。例 It is foolish of (for) you to do that. なお You are foolish to do that. は直接的で時にはぶしつけに響くので、一般的には it is の構文が好まれる(ジーニアス)

if you'll just show me where to put my things 「どこに荷物を置けばよいか教えていただければ」、if 節には未来を表す will, would は用いないが、動作主の主語の意志・習慣または相手に対する丁寧な依頼を表す場合用いられる。things 「荷物」

cry と weep cry は声を上げて泣く、涙を流して泣くの意味で最も一般的な語。weep は涙を流して泣くの意で、cry よりやや堅い語。泣き声よりも涙を流すことに力点が置かれる(ジーニアス)なお「鳴く」まで含めると英語の「なく」は実に多彩である。例えば社会言語学者の鈴木孝夫『日本語と外国語』(岩波新書、1990)には「なく」の語を多数列挙している。この中で注目すべきは動物(家畜)の泣き声を英語は明確に区別していることである。bark (犬がなく)、howl (大声でわめくようになく)、bay (犬が遠

ばえしてなく) roar (大きな動物が低い声でなく)、yelp (犬が鋭く短い声でなく)、yap (仔犬がうるさくキャンキャンとなく)、whine (犬などが鼻声でなく)、low (牛がなく)、bellow (牛が大声でなく)、moo (牛がモーツとなく) (幼児語)、neigh (馬がなく)、whinny (馬が嬉し気にいなく)

その他、豚、羊、ロバ、小鳥、カラス、鶏、アヒル、鳩、ふくろう、鶴、蛙、猫等多くの例が紹介されている (188-89)。この違いは何だろう。おそらく西欧の牧畜文化と東洋の稲作文化の違いによると思われる。

Say 「ねえ」 こんな簡単な語でも知らないと誤訳のもとになる。相手の注意をひく時に使う。P. 8 では Look が使われていた。

lover 今は男性の愛人に用いられる (新英和)

P. 18 **Yeah** [jɛə] *colloq.* (orig. U.S.). Repr. A casual pronun. of YES (OED)、初例は1905とある。

huh [hʌ, hə] (文尾で) 念を押すように、「どうなんだい、そうだろう」

gotta=got to P. 18から P. 19にかけて、生きた英語のオンパレード。

oughta=ought to, **shouda**=should have, **musta**=must have, **woulda**=would have

only ここでは形容詞ではなく接続詞「ただし、だがしかし」

honey 見知らぬ人や、さして親しくない人に対して用いる場合、時に不快とされる (ランダムハウス)

P. 19 **Uh, huh** [ʌhʌ] 鼻にかかった音、うん、うん (yes) 肯定・同意を示す、uh-uh [ʌʌ] は「(否定・不同意を表して) うーん、いや」

beat it=to go away; depart (DAS)

scratching the back of his neck 「首の後ろをかく」(いらだち、困惑などのしぐさ)

ain't=isn't am (is, are) not の短縮形、has (have) not の短縮形、非標準とされるが、教養ある人にも使われつつある。ちなみに初例は1778年 (OED) なので、結構古くからある語であることがわかる。『アメリカ英語の語法』(研究社、1981) 323-26に詳しい。

ma'am [mæm] 「おばさん」 Miss よりも丁寧、madam よりくだけた語、mom ではない。

Well 「おやまあ」、驚き・非難の意がこめられている

P. 20 **had Miriam been curled on it**=If Miriam had been curled on it おなじみの重要構文のひとつである。

P. 21 **what if** 「(問いかけ・不安) ~したらどうなるだろうか」

of no importance=not important

identity 「自分であること」、自分がどういう存在であるかということ、「アイデンティティ」でも可。なお「身分証明書」は identity card よりも identification card (ID card) を用いる。「学生証」 student identification card、「暗証番号」 personal identification number (略して PIN)、UFO (unidentified flying object) もあわせて覚えさせる。

むすび

トルーマン・カポーティがわずか21歳で書き上げた作品「ミリアム」、(21歳と言えば履修学生と同じ年齢である)は彼の恐るべき才能を発揮させたといえよう。オ・ヘンリー賞受賞もうなづける。内容に関して何人かの学生に質問した。大都会ニューヨークの片隅でひっそりと暮らす未亡人ミラー夫人の「孤独」がテーマであることは、文中に現れる *alone* (1, 10), *a sensation of darkness* (2), *dream* (12), *separateness* (13), *helplessness* (14), *lifeless* (20), *petrified* (20), *funeral parlor* (20), *vacancy* (20), *strangeness* (20), *revelation* (20), *identity* (21) から予想できる。資料「アンケート」にもあるように、大半の学生が夢には関心を持っていることが判明したが、夢判断まで理解しているものは少数であった。フロイド、ユングの名前は挙げておいた。ミリアムがミラー夫人、老人が彼女の夫であることは容易に判断されるが、夢では抑圧された無意識が歪められて現れる、そのメカニズムは知らなかった学生が多かった。日頃無意識的に恐れていた、心配・不安が夢に現れるというごく簡単な夢の話は紹介した。

さて、結果として「ミリアム」は英語の読物、購読用の教材として優れたものの一つであることを再認識させられた。語彙やイディオム、文法(語法)、その他の生き生きとした会話表現(口語・俗語)も豊かで、かつ異文化としてのニューヨークやアメリカを知る上でも格好の教材となった。そしてだれもが毎晩見ている夢について考える機会をもてたことは、学生にとっても刺激的だと信ずる。つくづく思うのだが、教材選択が授業を楽しくしたり、つまらなくしたりする主要な要因だ。例えば Faulkner の “A Rose for Emily”、これなどは読んで刺激的、印象はいつまでも残るしアメリカ文学の中でも傑作中の傑作である。しかし英文の難易度や文化の視点はどのように活かされるのであろうか。また Hemingway の短編も印象的だが、今度は英文そのものよりも心理的分析の方に重心がある。まして19世紀の Hawthorne や Melville の作品講読は、今の学生には負担のみ多く、英語読解力の向上にはつながらないと思っている。

当然のことながら、“Miriam” 一編を読んだだけで、英語読解力が改善するはずもなく、繰り返し英文に触れることが英語読解力向上への最短の道である。後はこの授業を継続的に可能とさせるカリキュラムの問題が残る。なお本稿の末尾に復習用として、重要語彙・慣用句をリストアップした。

英米文化史の授業ではないのだが、英語という言葉の背景となった歴史や文化の知識が、英語読解上必要不可欠であることは多くの教員の意見の一致するところである。もちろん時間的制約があるので、すべての歴史や文化を教えることはできない。しかし一般常識の程度でよいので、キリスト教や聖書、地理や歴史を一通り学んでほしい。亀井俊介編『アメリカ文化事典』(研究社、1999)の同氏の序論「アメリカ文化の風景」は要領よくまとめられたアメリカ文化論である。

もう一つ重要なのは、英語読解力向上には英語の成り立ち（いわゆる英語史）を知っておくべきである。英語教員になるための必須の授業かと思いきや、英語学との選択となっているのは残念である。例えば国語教員志望の学生が『万葉集』や『源氏物語』を知らないとしたらどう思われるであろうか。そのような国語教員はいないはずである。少なくとも日本語の古い語彙や表現を修得して国語教員になるはずである。ところが英語の場合、この過程がすっぽり抜け落ちている。英語がどのような背景で誕生・発展して現在の国際語になったのか、その変遷を全く知らない学生が実に多い。そのためにも「英語史」は英語教員を志望する学生には必修とさせたい。英語史の知識、さらには今ではほとんど教えられなくなったシェイクスピアあたりの英語の知識がないと、言葉や文化の本質に迫ることは不可能である。英米文学を全く学ばないで英語の教員になれるのは確かだ。しかし以前は英語史の一部を英米文学が担ってきたのは間違いのないところである。

英語史の必要性は教員になれば、すぐに自覚される。英語における綴り字と発音のずれを考えてみよう。「ミリアム」にも出てくる（普通の英文にも必ず見かける）、例えば neighborhood, light, night, know, through, bomb の黙字と呼ばれる発音されない文字はどうして存在するのか。詳しくは寺澤盾『英語の歴史』（中公新書、2008）を通読してほしい。また最近の英語の変化、特に PC (political correctness) とよばれる障害者差別、人種差別、性差別の箇所は重要である。一例として、障害者差別を見ると、かつては cripple が、the disabled, the handicapped, people with disabilities となり、さらにはより進んだ PC 表現として physically different people, differently abled, physically challenged となる (169)。これは日本語でも同様で、かつての「老人」が「おとしより」、「高齢者」と呼ばれるようになった。よく言葉は社会を反映したものだと言われるが、PC に関しては特にその傾向が強い。

脇本恭子「英語史を通して学ぶ異文化・自文化理解」（『英語教育への新たな挑戦』、大修館、2010）の示唆的な論を紹介しておこう。「英語教員に求められる資質は、国際社会に通用する英語の運用能力と共に、広い視野から異文化を捉える受容力であるということは既述の通りである。特にこの後者の資質を伸ばす一つの方向性として、ある領域の特定の専門知識に限るのではなく、他の領域、さらには、他教科に跨った横断的視野からの指導法の構築を提案したい」（46-47）として、以下の質問を用意する。

- Q1. ブリテン島とその周辺部の地図を描き、知っている限り多くの地名を（河川・湖や海峡なども含めて）その地図に書き入れなさい。
- Q2. イギリスの正式名は何か？
- Q3. 英語はいつ頃成立したのか？
- Q4. “English” の語源は何か？

今後の授業に活かせそうな実践報告である。

今後の授業の課題

『ミリアム』に限らず今回取り上げた作品「20年後」、「チカモーガ」、「衝動」の作者はいわゆる WASP と呼ばれる白人男性で、アメリカの多文化主義を反映していないのが最大のいたらぬところである。『多文化アメリカ文学』の著者 A・ロバート・リーは、アメリカにおける少数民族としての黒人、先住民、ラティーノ / ラティーナ、アジア系アメリカ文学を幅広く取り上げる。そして「日本の読者の皆さんへ」(3) でアメリカ第 44 代大統領バラク・オバマの生涯こそ、アメリカの多文化主義のモデルになっているという。そこでは「オバマはケニア人でイスラム教徒の父と、アメリカ中西部カンザス出身でスウェーデン系アメリカ人の白人の母から生まれた息子です。彼は少年時代をインドネシアで、それから十代はハワイで白人の祖父母とともに過ごしました。それからロスアンジェルス短大、ニューヨークのコロンビア大学、さらにはハーヴァード法科大学院で学び、その後、シカゴの黒人地区でコミュニティ・オーガナイザーとして働きました。これら全ての経歴を基盤とすれば、オバマはまた、多文化アメリカを真に代表する最初の大統領だと言うことが、まさしく正鵠を射ることになるでしょう」と書かれている。

多文化主義の欠如はいかんともしがたいが、次の機会に譲らざるをえなかった。本稿に画像を取り入れればさらにわかりやすい論になったと思われるが、紙幅の都合で割愛せざるをえなかった。なお評価のレポートは、テキストの“Impulse”の最後 4 ページを和訳し、注釈をつけてくることであつた。こちらが期待していた英英辞典は残念ながら引いてもらえなかったが、またいつの日か今回の授業を思い出して OED その他の辞書に接することを願う。最後に復習用として重要語彙・慣用句をリストアップし、自前の授業アンケートを作成し、資料として巻末に載せているので、学生の動向を考えるのに役立つと思う。

* 本稿は「アメリカ英語読解研究演習」(2012 年度 1 学期)の授業をもとに、加筆したものである。出典の明示していないものは、ジーニアスによつた。参考文献は入手しやすい(読みやすい)ものに限定した。発音記号はランダムハウス、その他による。

参考文献

辞書・事典類

- 安藤貞雄編『英語イディオム・句動詞大辞典』(三省堂、2011)
- 井上義昌編『英米風物資料辞典』(開拓社、1971)
- 上田・渡辺・海老根編『20 世紀英語文学辞典』(研究社、2005)
- 大谷・堀内監修『社会人のための英語百科』(大修館書店、2002)
- オックスフォード大学出版局『図解英和大辞典』(マクミランランゲージハウス、2002)

- 木下他編『英語文学辞典』(ミネルヴァ書房、2007)
 小西友七編『現代英語語法辞典』(三省堂、2011)
 小西・南出編『ジーニアス英和大辞典』(大修館書店、2001)
 小林祐子『しぐさの英語表現辞典』新装版(研究社、2008)
 齋藤勇監修『英米文学辞典』(研究社、1985)
 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版出版委員会『ランダムハウス英和大辞典』(小学館、1994)
 新村出編『広辞苑』第六版(岩波書店、2008)
 竹林滋編『新英和大辞典』(研究社、2002)
 土居・福原・山本監修『英語歳時記』(研究社、1978)
 中村保男『新編英和翻訳表現辞典』(研究社、2002)
 日東書院本社編集部『ビジュアルディクショナリー』(日東書院、2012)
 堀内克明編『アイ・シー・オール』(学習研究社、1990)
 松村他編『辞林21』(三省堂、1993)

- Burchfield, R., et al. *The Oxford English Dictionary*. Cambridge: Oxford UP, 1989. Print.
 Gove, P., et al. *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*.
 Springfield, MA: Merriam, 1961. Print.
 Random House. *The Random House Dictionary of the English Language*, Second Edition. New
 York: Random House, 1987. Print.
 Kipfer, Barbara Ann, ed. *Dictionary of American Slang*, Fourth Edition. New York: HarperCollins,
 2007. Print.

一般書

- 石黒マリーローズ『聖書でわかる英語表現』(岩波新書、2004)
 稲澤秀夫『トルーマン・カポーティ研究』(南雲堂、1985)
 磐崎弘貞『英語辞書をフル活用する7つの鉄則』(大修館書店、2011)
 内田豊『トルーマン・カポーティの作品論集—「グロテスクなもの」との出遭い』(開拓社、2006)
 大津幸一『英語の疑問=こう考えてみよう』(岩波ジュニア新書、2004)
 賀川洋二=文 桑子学=写真『図説ニューヨーク都市物語』(河出書房新社、2000)
 カポーティ, トルーマン / 川本三郎訳『夜の樹』(新潮文庫、2011)
 ____ / 村上春樹訳『ティファニーで朝食を』(新潮文庫、2008)
 上岡克己『アメリカの国立公園』(築地書館、2002)
 上岡伸雄『ニューヨークを読む』(中公新書、2004)
 亀井俊介編『アメリカ文化事典』(研究社、1999)
 ____『ニューヨーク』(岩波新書、2002)
 ____『わがアメリカ文化誌』(岩波書店、2003)
 川口喬一編『文学の文化研究』(研究社、1995)
 研究社出版編集部『英語青年』(2004年12月号)(研究社、2004)
 ____『大学生の英語学習ハンドブック』(研究社、1999)
 小迫他『英語教育への新たな挑戦』(大修館書店、2010)
 小西友七『アメリカ英語の語法』(研究社、1981)

- 最所フミ『英語と日本語——発想と表現の比較』(研究社、1975)
 坂本他『英米事情ハンドブック』(英潮社、1993)
 佐々木謙一編『ニューヨーク情報辞典』(研究社、1988)
 里中哲彦『英語の質問箱』(中公新書、2010)
 サリンジャー、J. D. / 村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(白水社、2006)
 忍足欣四郎『英和辞典うらおもて』(岩波新書、1982)
 渋谷孝『文学教材の新しい教え方』(明治図書、2003)
 鈴木孝夫『日本語と外国語』(岩波新書、1990)
 大学英語教育学会文学研究部会編『「英語教育のための文学」案内事典』(彩流社、2000)
 大修館編集部『英語教育』(2004年10月増刊号)(大修館書店、2004)
 寺澤盾『英語の歴史』(中公新書、2008)
 常盤他『アメリカ情報コレクション』(講談社現代新書、1984)
 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』(NHKブックス、1992)
 中内正利『アメリカの風物』(研究社、1953)
 中尾まさみ編『「東京大学の英語教育」の一体改革の道標と今後の展望』(東京大学教養学部英語部会・教養教育開発機構、2007)
 ピーターセン、マーク『続日本人の英語』(岩波新書、1990)
 〃『日本人が誤解する英語』(光文社、2010)
 〃『日本人の英語』(岩波新書、1988)
 元田脩一『短編小説の分析と技巧』(開文社、1959)
 山田雄一『日本の英語教育』(岩波新書、2005)
 リー、A・ロバート / 原・野呂訳『多文化アメリカ文学』(富山房インターナショナル、2010)
 渡辺利雄『英語を学ぶ大学生と教える教師に——これでいいのか？英語教育と文学研究』(研究社、2001)
 〃『講義アメリカ文学史 [全3巻]』(研究社、2007)
 Capote, Truman. *The Complete Stories of Truman Capote*. New York: Random House, 2004. Print.

Review

Vocabularies

insurance, cosmetic, feature, plain, inconspicuous, spontaneous, advertisement, box office, correct change for admission, fragilely, genuine, criminal, moderately, purse, impenetrable, vaguely, phone book, bureau, stamp, thaw, desertion, replacement, vulgar, cardboard, relative, luminous, console, embarrassed, abruptly, funeral parlor, loom, vacancy, penetrate, revelation, identity, trance, contentment, replace

Idioms

to speak of, take one's place, take one's own time, not in the least, care to, do one a favor, against the law, don't tell me, It was nice to have met you. lose track of, give way, in heaven's name, make difference, leave ~ alone, lose one's temper, catch one's breath, turn to, for God's sake, for certain, calm down, take it easy, beat it, in place, be aware of, what if, of no importance

2012年7月20日实施

1. この授業を履修した理由（複数回答可）
 - a. 英語読解力の向上
 - b. 教職に必要なため
 - c. 英語で文学作品を読みたいため
 - d. 卒業単位数を満たすため
 - e. その他（時間割の関係上この時間が空いていたため等）
2. 受講者数（実質20名）について
 - a. 多すぎる
 - b. 少し多い
 - c. ちょうどよい
 - d. 少し少ない
 - e. 少なすぎる
3. あなたは「英語史」や「イギリス文学史」、「アメリカ文学史」などの授業を受講したことがありますか。
 - a. はい
 - b. いいえ
4. この授業の履修で英語読解力は向上しましたか。
 - a. はい
 - b. いいえ
 - c. どちらとも言えない
5. あなたの専攻は英語（例 英語コミュニケーション、第二言語習得論、英語実験音声学、言語学）と関係がありますか。
 - a. ある
 - b. ない
6. いままで英語圏の文学作品（小説、詩、演劇、ノンフィクション、エッセイ）を英語で読んだことがありますか。
 - a. ある 例をあげてください（ ）
 - b. ない
7. 文学（日本文学も含む）を講読することで得られるものは何だと思いますか。（複数回答可）
 - a. 教養のため
 - b. 思考力（想像力）をのばすため
 - c. 社会への関心
 - d. 知的な関心
 - e. 特にない
8. いままでの英語の授業（共通教育を含む）で英英辞典を引くことがありましたか。
 - a. ある
 - b. ない
9. この授業で主に学んだことは何ですか。（複数回答可）
 - a. 英語という言語の奥の広さ
 - b. 文学作品の分析、文学の楽しさ

- c. 辞書・事典の使い方
 - d. 異文化（アメリカ文化）の楽しさ
 - e. その他（自由に記述してください）
10. この授業の意図（英語によるアメリカ短編小説を通して英語読解力の向上をはかるとともに異文化にも触れる）からあなたの英語読解力と異文化への関心は広がりましたか。
- a. はい
 - b. いいえ
 - c. どちらでもない
11. 講読した4編の作品の中で印象に残った（面白かった）作品をあげてください。
- a. “After Twenty Years”
 - b. “Miriam”
 - c. “Chickamauga”
 - d. “Impulse”
 - e. 特にない
12. “Miriam”について、英語の難易度はどの程度ですか。
- a. 難しすぎる
 - b. 少し難しい
 - c. ちょうどよい
 - d. 少し易しい
 - e. 易すぎる
13. “Miriam”について、内容は理解できましたか。
- a. できた
 - b. できなかった
14. 夢について、いままで考えたことがありましたか。
- a. ある
 - b. ない
15. “Miriam”について、あなたは Street と Avenue の違いを知っていましたか。
- a. はい
 - b. いいえ
16. あなたは “for a second time” の “a” の意味を知っていましたか。
- a. はい
 - b. いいえ
17. 英語読解研究の授業に何を期待しますか。自由に記述してください。

集計結果

提出者数 21人

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. a. 15 b. 6 c. 5 d. 8 e. 2 | 2. a. 0 b. 2 c. 18 d. 1 e. 0 |
| 3. a. 11 b. 10 | 4. a. 13 b. 0 c. 8 |
| 5. a. 16 b. 5 | 6. a. 11 b. 9 回答なし 1 |

(例) ガラスの動物園、赤毛のアン、不思議な少年、人間とは何か、Jane Eyre, Alice in Wonderland, Romeo and Juliet, Sophie's World, The Secret of the Garden, The Last Leaf, Harry Potter, Apollo 13, オアシス (自律学習支援センター) においてある漫画

- | | |
|--|-------------------------------|
| 7. a. 11 b. 15 c. 7 d. 11 e. 0 | 8. a. 9 b. 12 |
| 9. a. 17 b. 8 c. 10 d. 3 e. 0 | 10. a. 17 b. 1 c. 3 |
| 11. a. 10 b. 7 c. 5 d. 4 e. 0 (複数回答あり) | 12. a. 4 b. 13 c. 3 d. 0 e. 1 |
| 13. a. 17 b. 4 | 14. a. 19 b. 2 |
| 15. a. 5 b. 16 | 16. a. 1 b. 20 |

17. 全員からの記述あり。

文章の詳しい訳、場面による単語の使い分け

英語圏の文化を知っていないと読解しづらい文やスラングなど上手く読み解く練習をすること、スラスラ読解できるようになることより、英語で書かれた文学作品のニュアンスに慣れること

文法というよりは、一つ一つの単語や複合語の使い方について学ぶこと

今後、自分で読解するときに役に立つ知識・手法を身につけられること

文学作品を読むときによく出てくる表現方法 (倒置や省略など) をもう少し知りたかった
読みやすい作品などの紹介

長文読解の向上

普段なじみのある単語で意外な意味を持つ単語をしりたい、単語の使い分け (avenue と street, night と evening 等) 作者がどうしてこの作品を書いたか、時代との関連

読解力の向上

訳すことに対して今まで抵抗がありましたが (自信がなくて)、この授業でいろんな訳し方を学ぶことで興味・関心が湧くようになった

小説からその当時の文化や社会背景まで読み取るというスタンスは、やってて楽しかったの
で、これからもこのようなことを続けていくと面白いと思いました。あと、いろんな辞書の
紹介や使い方をもっと紹介した方が面白いと思いました。

英語で作品を読むおもしろさを感じる

文化を学べる、辞書を使いこなせるようになる、idioms を学べる

読解力の向上、辞典の使い方など

特にありません

文学作品を今まで読んでことがなかったのでおもしろかったです。ありがとうございました
解釈の難しい文学の理解力の向上

今まで深く考えなかったこと例えば "for a second time" の "a" などについて、より知識が
深められること

一つの単語でも多くの意味があることを学び、文法、翻訳能力の向上

通常の授業では学ぶことの少ない知識の習得

最近の作品、近代のものも読んでみたいなと思いました